

### 2015年スケジュール

2015年6月18、19日  
全国油症治療研究会議

ホテルレガロ福岡〔福岡県福岡市〕に於いて開かれました。

全国油症一斉検診

下記の11班により年に1回実施しています。

### 昨年の研究成果

2015年6月18、19日に全国油症研究会議が開催されました。多数の基礎的・臨床的研究の報告が行われました。その概要をご紹介します。

### 平成27年度全国油症治療研究会議より 〔その1〕

毎年油症検診結果の集計を行っています。受診者の健康管理のため、また毎年集計結果の積み重ねにより判明する症状の傾向や変化を治療研究に活かすために行っています。

福岡県保健環境研究所保健科学部の梶原淳睦先生は、油症検診の実施状況と、平成26年度の油症患者さんの血液中PCDFなどの測定結果について報告されました。

<報告内容>

平成26年度に全国油症検診を受診されたのは、油症認定患者さんが549名、未認定の方が154名の計703名で、PCDF等測定された油症認定患者さんが246名、未認定の方が154

名の計400名でした。その結果、油症認定患者さんの血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度は平均99.2 pg/g lipid、未認定の方は14.9 pg/g lipidでした。未認定の方1名の血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度が50 pg/g lipid以上でした。

油症検診の集計結果等から得られた油症患者さんの症状と、血液中ダイオキシン類濃度との関連を調べています。油症患者さん特有の症状を見出し、治療研究に活かすために行っています。

奈良県立医科大学健康政策医学講座の松本伸哉先生は、ダイオキシン類の半減期（血液中の濃度が半分に低下するのに要する時間）の研究で明らかになったことを報告されました。

<報告内容>

2,3,4,7,8-PeCDFを中心に油症患者さんのダイオキシン類の半減期の研究を行ってきました。その結果、(1)ほとんど血液中ダイオキシン類濃度が減少していない人たちがいること、(2)濃度が減少していない人たちが増加していること、(3)スギ花粉症などで咳・痰が多い人は、半減期が短い傾向にあること、(4)体重の変化は血液中ダイオキシン類濃度に影響を与えるが、半減期に影響を与えていなかったこと、(5)全く同じ半減期を有しているダイオキシン類化合物が存在すること、(6)一般人より濃度が高い方の2,3,4,7,8-PeCDFの半減期は伸びているが、一般人より濃度が低い方のOCDDの半減期は短くなっていること、(7) AhR（芳香族炭化水素受容体）の遺伝子のSNP（一塩基多型）は、AhRの産生量の差異を引き起こすと考えられているが、半減期には大きな差はみられなかったこと、が明らかになりました。

裏面もお読みください。→

### 平成27年度 自治体連絡先

**福岡県班**（福岡県、大分県、宮崎県）  
福岡県保健医療介護部保健衛生課食品衛生係  
TEL：092-643-3280

**長崎県班**（長崎県、佐賀県、熊本県）  
長崎県県民生活部生活衛生課食品乳肉衛生班  
TEL：095-895-2364

**関東以北班**（東京都、川崎市、埼玉県、さいたま市、茨城県、横浜市、神奈川県、栃木県）  
東京都福祉保健局健康安全部食品監視課食中毒調査係  
TEL：03-5320-4405

**千葉県班**（千葉県）  
千葉県健康福祉部衛生指導課企画調整班  
TEL：043-223-2638

**愛知県班**（岐阜県、静岡県、愛知県、三重県）  
愛知県健康福祉部保健医療局生活衛生課食の安全・安心グループ  
TEL：052-954-6297

**大阪府班**（滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県）  
大阪府健康医療部食の安全推進課安全推進グループ  
TEL：06-6944-6703

**島根県班**（島根県、鳥取県）  
島根県健康福祉部薬事衛生課食品衛生グループ  
TEL：0852-22-6292

**広島県班**（広島県、岡山県）  
広島県健康福祉局食品生活衛生課  
TEL：082-513-3106

**山口県班**（山口県）  
山口県環境生活部生活衛生課食の安心・安全推進班  
TEL：083-933-2974

**高知県班**（愛媛県、高知県、香川県）  
高知県健康政策部健康対策課  
TEL：088-823-9678

**鹿児島県班**（鹿児島県、沖縄県）  
鹿児島県健康福祉部生活衛生課食品衛生係  
TEL：099-286-2786

奈良県立医科大学健康政策医学講座の赤羽学先生は、2008年度実施のカネミ油症患者実態調査の結果を油症発生前に出生していた群と発生後に出生した群に区分して解析し、さらに一般成人を対象に実施した対照群の調査結果と比較し、その結果を報告されました。

#### <報告内容>

2008年度実施のカネミ油症患者実態調査を油症発生前に出生していた群と発生後に出生した群に分けて、一般成人を対象に実施した調査結果と比較しました。発生後出生群は、胎児期、もしくは母乳を介してダイオキシン類に曝露した認定患者さんです。その結果、発生後に出生した方々の中で、「これまでにかったことがある」疾患や症状がある方の割合は、発生前に出生した方々と比べて減少していました。また、発生後に出生した方々では、眼脂過多（目やに）、色素沈着、爪の変形、全身倦怠感、手足のしびれ等の症状がある方の割合が対照群より多いものの、顕著な差ではありませんでした。

九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センター（長崎大学病院皮膚科・アレルギー科）の峯嘉子先生は、平成26年度の長崎県油症検診受診者の血清中の制御性T細胞数を測定し、血液検査項目との関連性について報告されました。

#### <報告内容>

平成26年度に長崎県油症検診を受診された56名（男性30名、女性26名）について血清の制御性T細胞（Treg細胞：免疫の恒常性維持に重要な役割を果たしている細胞です）の数、各種血液検査項目との関連について解析しました。その結果、認定患者さんのTreg細胞数は認定されていない方のそれに比べ低い傾向がみられました。男女間ではTreg細胞数に有意な差はみられませんでした。各種検査項目（赤血球、ヘマトクリット、総蛋白、クレアチニン、尿酸、HbA1c、中性脂肪）とTreg細胞数の間に明らかな相関はみられませんでした。

九州大学大学院医学研究院整形外科学分野の福士純一先生は、2010年度全国油症検診の受診者の骨密度とダイオキシン類濃度との関連について報告されました。

#### <報告内容>

2010年度全国油症一斉検診の受診者489名において骨密度を測定し、ダイオキシン類濃度との関連について検討しました。認定者は319名、未認定者は170名。福岡県158名、長崎県207名、その他の県が124名で、男性は227名（平均66.9歳）、女性262名（平均66.3歳）でした。

居住地および体格（Body Mass Index）で調整して検討した結果、男性では骨密度とダイオキシン類濃度との間に、

有意な（統計学的に偶然とは考えにくく、意味があると考えられる）関連を認めませんでした。女性においては、一つのダイオキシン類化合物、1,2,3,4,6,7,8-HpCDDの血中濃度と骨密度Zスコアとの間に、有意な負の関連を認めました。

1,2,3,4,6,7,8-HpCDDの血中濃度は、油症患者と健康者との間で違いがないと報告されています。なお、ダイオキシン類曝露が女性において骨密度を低下させるか否かについては、更なる検討が必要です。

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚病態学分野の鉾塚大先生は、上皮成長因子受容体であるEGFRの発現について報告されました。

#### <報告内容>

ダイオキシン曝露により誘発された塩素性痤瘡の組織中では上皮成長因子受容体（EGFR）が活性化していること、また、血清中の可溶性EGFR（血液中に遊離しているEGFR蛋白）が、数々の悪性腫瘍の予後（今後の病状についての医学的な見通し）と関連しているとの報告があります。そこで長崎県の油症患者さん血清中の可溶性EGFRの検討を行いました。その結果、油症患者さん31名、対照群1名において血清中の可溶性EGFRはそれぞれ $63.10 \pm 23.52$  pg/ml、 $58.81 \pm 16.84$  pg/mlで、油症患者さんで高い傾向がみられましたが、2群の間に有意な差はみられませんでした。

九州大学大学院医学研究院附属総合コホートセンターの二宮利治先生は、平成27年度中に地域住民を対象に、血中ダイオキシン類濃度と様々な疾患の頻度や疾病マーカーとの関連性について調べることを報告されました。

#### <報告内容>

高濃度ダイオキシン類曝露により、悪性疾患や眼科的・皮膚科的疾患、骨粗鬆症、生活習慣病などの様々な健康被害が生じることが示唆されています。一方、低濃度ダイオキシン類への曝露が生体に及ぼす影響は明らかになっていません。本研究では、福岡県久山町の40歳以上の地域住民のうち、研究参加に同意した約500名を対象として、血中ダイオキシン類濃度と様々な疾患の頻度や疾病マーカーとの関連性を調べます。さらに、地域住民と油症患者さんの調査データを比較し、油症患者群に合併する疾患の特徴を検討します。本研究の成果により、ダイオキシン類の生体に及ぼす影響が明らかになることが期待されます。

昨年研究成果の概要は、油症ニュース第28号に続きます。